



第九五九號
 第一函〇二號
 氣 酒
 藏所園果香

中村俊定文庫
 文庫 18
 320





中村俊定文庫

白鳥堂

大に中乃嘉祥き人
 吾に秋和樂に志る人
 清く厚き風尔并き人
 秋月環る澄みあ
 りて遠く世に露の敷る
 りまをと現し柳林の
 若葉をよまの者

麗子

寶曆曆四甲戌

秋月



此系川今所庫

靡るもやしあふ光也今月
 波に流るや月の光裸る月の
 福満乃重なる山や秋の月
 夜に照る星とたると月秋夜
 月影に秋そ日ハるる月宮境
 秋のそよよあそもんの光のま

王宇

垢清く思ふ慕ふるも子尔夜月らん
 吟月也馬はうりふて互に白
 くらうやまの裾尔を原と針

有佐
 湖十
 紀逸

其扇

佳丈

千林

知十

官字

千王

名もあふるも実のさるる川

田社

玉兔

今月月物見の松一思あきり
昔々月河由むと月念る
名月や後あゆむものうる
秋の萩一初萩あら地月
交る物人の信萩也月今宵
名もあふるの萩の梅も花
名月月の萩と世も度も紫の
名もあふる也垣毛練瓜の水車
来りて思あきる名理あきる
名もあふる也才のまはれ三日の月

舊室 左簾 蒼孤 點瑟 良雨 積羽 沾涼 眠井 瓜頂 萬丁

玉膏

名もあふる也琴吹人の遠通里
親喜の山八家ふるさとり
名もあふるの山もく二日
あきあきと世もあきと世の月見
月今宵月歴八只月月萩の
蛸刺す月ハ蛇も何りも
お度と後尔福宜う月見

玉盤

拾也珠の貝何も子らふの
的月の搜一も照る也山も水
名もあふる也後もあきる

貞屋 貞堂 貞因 貞風 貞曆 金羅 園二 拾翠 蕪太 嵐亭

陰兎
月々秋のくろくしの海乃鹿

桂華

今日月大敷の音は志あり
りりりやとやうなまを清く
りりりやとやうなまを清く
第庭のやうなまを清く
りりりやとやうなまを清く
をを木にまを清く
りりりやとやうなまを清く
りりりやとやうなまを清く
りりりやとやうなまを清く

紀影
買鏡
志女
義旭
鶯聲
花暎
志考
桂龍
東鯉

永我

りりりやとやうなまを清く
りりりやとやうなまを清く
りりりやとやうなまを清く
りりりやとやうなまを清く
りりりやとやうなまを清く
りりりやとやうなまを清く
りりりやとやうなまを清く
りりりやとやうなまを清く

闇車
冠李
不淺
龜龍
冬松
雲長

涼兎

おーむのくろくしの海乃鹿
りりりやとやうなまを清く
りりりやとやうなまを清く
りりりやとやうなまを清く
りりりやとやうなまを清く
りりりやとやうなまを清く
りりりやとやうなまを清く
りりりやとやうなまを清く

圖文
臺簫
机睡
李風
烏丸

盃や花よりは酒ののど白く月
信濃より新著向麦許りふのう
猫の目の睛を丸に月見うも
能知あるのうはて働く月見
汲中尔二の以車やりふも月
回尔結る橋の糸のあやかり
欄や他を語く今日乃月
くもろや落くかさる松の指
物言の木を丸に月見
名月や橋の掛るうらむも
くもろや踏む上るのの帯
名月や星の下のうらむも

東里 翅風 藤女 素明 鼠尾 祇木 丹志 杜谷 許人 紀鳥 紀夕 紀雲

のこし松平をよー今日波月
名月や糸のゆかりの琴の海
くもろや松の金雲の小をゆき
名月や耳を何やうる虫の夢
かこむ者ハ浮世一掃る月の友
出ぬらんあはれく見ぬーり

金波

常尔ゆり名をぬりそののど月
青梨子をも竹と出るまじり
あはれ大の青海原やのど月
あはれ余は平見る秋やうらむ
名月尔はる布端川邊可南

紀粧 紀九 純王 蛙井 蛙柳 淫狐 三峯 万頃 丹鳳 田且 官路

蕪山尔手巾の鳴音やうぶ月
名月の視干波むまのこ田川
乙尔少轂う遊やのる日乃る
うらまや煙立と向る柳 陰
有るくは起稲葉たのやう月
長起秋の短く鳴る月る成
名月や鳥を麻つる鳥かこ山
うらまや小井毛動くあま井板
うら月尔一あま申う一保まは
銀箔尔月の海光るるやう月

娥影

相重
梅旭
薰水
湖雷
石静
豊州
田曉
桂社
一社
社場
青路

名月ハ外の竹よりまき起り
あまうらまうらま出るや名月秋
亭の戸を踏くは鳴る月る成
朝がし一銀箔く重日る成
公望をと見る也まら一ふ成

陰精

其蘭
其民
美鷹
逸資
白鳥
觀川
隣笑
立笑
賀亭
信鳥

一輪宇宙盃

下戸ハるる土の尔尾て仰めりう有

名小一河小星、蒼う月一輪
之強く秋尔桂の月見式
月見の尔子名をり拂り船
是原小人を求合り也月今宵
照月尔好く物く称くも
お飾屋ハホあ乃ハ月見の由
今宵月落見未るらん江戸を望
りるや露を坂を志し果
計幣眼を奉仕志しりるの
海尔浮見山小川をくも
名るや和をくもおの庭
先づよ乃月見の名をり下町

社嵐
依山
南平
揚花
文彦
柯雲
律山
亀永
慶車
文羊
書眠
民我

名月也年 両

月やふのふくくも附初る
男のハ女ハ 何れ今日乃月
或は月見の保奇を

月帯蝕

名も月の輪ハぬ者ハ減る月
くや月法をり也を草の執

桂子

鼻席の光を増やりかか月
月もてを鏡う也の世を人
明月や人月の心并ハ伊弉山
傾情の慮見習ふが之を人

神奈川 鈍牛
全字 吾川
日 呂溪
京 輕我
尾 芳掬
大坂 掬壽
阿 時中
不敏

田のふれ彼を夢あふりふ夢を月
 梅作りハ素向尔中く月見成
 お母こおはあをこ——きあ有
 くら月やまをとり山みう乃原
 くらんのうふ物おをい勢思及到松
 くら月や十のまま子ハまらうう
 お舞身まといさ空を人草名月
 葉物まう政の包を月見成
 里ハ時を名留るし月見成
 くらうや麻思尔起てあめ鳥
 武を思ハみらう月見成
 くら野小化るまら起るお成

阿洲 朝風
 村山 盛泉
 花永
 吉川 看我
 押細 長秋
 日 梅下
 日 百郎
 彦澤 冠鼻
 全子 萬梅
 日 川雨
 日 先長
 担帛

りんくも後道入尔店者門
 月今宵研多部尔入焉成
 揚るる成他に袖子やりの月
 舟も掉さして月見成
 くらうや出梅ふ松尔里下里
 鐘の音尔袖子山崎月見成
 ういあむてまめ直らう月見成
 くらう尔浮世あや山戸ソ戸
 横あ〜尔又あや起〜月見成
 くらうや中〜小戸のるれため馬
 三おお中玉子色消尔りり
 大ッ子小丸イ文子ら〜り成

日 推敲
 日 文狼
 日 其楓
 日 臣水
 日 柳蝦
 日 緑水
 日 舎谷
 日 里任
 日 寛理
 日 梧鳥
 少年 花羅
 永里

子習の休日晴一の白かみ月
浮橋の月を末を一夜かくしんか
松一本池の神紙や月今宵
うら月や三穂の松原浮来

素娥

月の人見はふふつくま紋所
松坂を杉枝たうりて月見の
乃あうの戸を招る文とこるんか
うら月や磯辺のうら月ととと
うら月や屋敷とうら月と屋敷
うら月や磯の背端の松紙
名月か変を能波の海老

少年
保
陸我
市我
浮来

英屋
紅友
英賀
英砂
圭子
素光
沙柳

名月や池の地を出入り
我流中々のうら月乃松枝
あなあは燈火つて今日の月
皆人の鏡みらるる月かみ
あなあは松枝はまわりの月
推の末とまふ月を出入り
舟まきくつるを惜なり
行るや秋さるる月か
杉月の座鋪尔少其月か
櫻鐘とあなあつて月見

兔園

紫の月をのめくま紫の月か

氣腸
蝶子
志斗
山家
蘭撓
器友
葉櫻
似斗
春鶴
龜鶴
何霓

枝豆とて貴族——とや若乃月
明月とてはくや松乃力 福
明らや嘘小つとて思ふ二の峯
実をさふとていふに月たて月
老のま——翠峯の玉乃月今宵

丹桂

名月ハ古里うらん 源六郎
まよりくも竹の戸のりく月
りん月小和馬の波打硯の南
りんらや十二の宵のあま
り月也柳の枝ハ舞鶴の神
我々のまともく 峯を思ふ

越枝
陳霸
五老若
窓裡
麦洗

貴川
華林
義勇
池水
哥夕
薪仙

まきのく 新福山や月今宵
新 月也 笑食夜長あゆま

素示舒

月筆や日筆 尔由そりそ月
くん月やハ子由旬此れ元
紫のに戸てもふ——乃月
音らとて何花とて思ふ
り月也やとて月 けはあふ
燈の影の世界ハ思ふく月今宵
名月やとて今 経の白き
りんらやんく 尔教をぬり
扇を構む末末のり——月今宵

扇置
里夕

槐甫
牧童
孟律
牧具
觀水
仙州
長秀
祇水
何郷

元日の貞のりる星出月見りも
く月や菊のる名世九日る星
相尔波影か板屋の月見り
の月や鐘を流れて一
く月や々々月ハあるを扱ひする
切味一の歌を喜ぶるさし
く月や何よりふせく物を
く月や爾事さし思ふを
く月や人尔逢神思回男あり
く月や待るる山を掃ち起る
く月や穴の格ハ極
登る人ハ

更鏡
物雲
居行
翰當
宜来
ら名
人左
祇光
市朝
市溪
祇月
翠帆

鐘つまは力もくうな
く月や歌を出さし思ひ
菊根あさるる山や今乃月
引清く名鐘かの月
く月やソソを山判ハ
多の今時の中ふり
日乃本中なるるとの月
く月や底山を見申る
月今乃の長年を歌
精輪
月々乃日平尔依姑
大和の歌か

千蝶
里山
長塘
藤香
左得世
冬美女
藤紅
長國
登巴
豊突
風粗

あゝ尔一ツ金鏡やかつて
梳牙を出せば秋は後一月の夜
空のまらるる空はくもはや月乃松
折平をうかしてはるや月乃松
通ふ月よまのこゝる秋は一掃の
映抄やふるまは足踏して月乃松
仲磨う個やふるまは一掃の月
川網のゆえに余る月乃松
振袖のまはれは秋はや月乃松
ゆふまのこゝる空はくもはや月乃松
むしやと風やのまはれ月乃松
人や志を一掃の秋はくもはや月乃松

風光 柳枝 志斗 沾赤 拙詞 白鳳 宜東 波月 楚挑 馬帳 嘉幸 觀谷

月一ツ秋尔数何る田舎のま
盈小色や月乃松は生一をゆ

把菊 潮秋

更笠壽

雪、錦今や月乃松は池をうり
月々や月乃松は浦にそまはれ
吹流のこゝる空はくもはや月
田舎の月乃松はくもはや月
空のまらるる空はくもはや月

故川 三松 巨口 井蛙 春湖

金精

茅や豆の月乃松は合つては山
松乃葉尔掛る空はくもはや月
鶴の空をうりはくもはや月

敬屋 菊青 舟羽

くもる也いづれ一う受る親の糸也
乃尔又る也を又て若かりて有
生研毛今や月ハ申る勢月友

蟾枝

くもる也裡夜今何うハ一
り有自尔秋の心と忘り何
果志くぬ帆夷を日本月見
鳴の海多廣の底を月見う
行ありと算る為と秋を月見
又科と厩と見んは乃月

柳主
和響
雨滴

不全
如柳
風至
歸朝
里橋
吟少

梅月



茲梅月の望に親也
融多梨賞陰和樂
毛便子毎一也去り此
候宵と舞人今從人衆
乃物く心玉臺城教
月祿洞其的拙福酌干
子と副酒のさほく
亦をけ言味何事と
知處一弱更上戸ハ
お阿むみ立之海邊に
酒我路せと流目人

心

心

唐詩は湯ありと吾等
互に力哉合御座り
吾一人由心下知まらざる
依たり里人のみ
る紙と毛一白を忘
るまの

書附多利

秘
清月浪の呼

吸

智
其の海

五麗子夷麻呂



花嶽慎書



